横浜詩人会事務局　横浜市都筑区大棚町 392-8　関中子方
発行人　保高一夫（会長）横浜市港南区野庭町 622　野庭団地 3-345 西村方
＊郵便振替　00230-0-5574　ヨコハマシジンカイ／ http://yokohamasijinkai.web.fc2.com/

今後の不安

金井 雄二

今年の三月三十一日をもって、図書館という職場を定年退職した。仕事なんかせずに、詩人として生きていこうかとも考えた。だが、もともと詩人じゃないし、詩で稼げることもない。ぼくは詩が好きなだけの、ただのおじさん。今は再任用制度があるので、市の公民館で週四日、働くことになった。

定年になったら、あれもしよう、これもしようと考えていたのだが、何一つとしてできていない。その中のひとつとして、読書がある。ある程度の時間ができれば、まとまった読書ができるだろうと思っていた。これがなかなかそうはいかない。この四月に母が亡くなったことや、息子が結婚するという家庭の事情もあったが、やはり自分の意識が大切だということ。意識して本を読もうと思わなければ、絶対に読まないのだ。それは読書だけに限らない。映画を見ることや美術や音楽等、新しい物事に興味を持つ、ということは自発的に意識をしなければだめなわけだ。こんな当たり前のことがやっとわかった。もしかして、今までは、自由な時間がないという切迫感の中から、自らその時間を見出して本を読み続けてきたのかもしれない。ということは、忙しいほうがいいということかもね。

もう一つは旅行がある。知らない場所に行ってみたいと思う。海外はもとより、日本の中をもっともっと歩いてみたい。でも今の勤務状況は、定期的な休みは月曜日だけで、あとはランダムな休日になっている。連休があまりなく、なかなか旅行もままならない。こんなはずじゃなかったんだけど。いろんな場所に行って、いろんな人に会っていろんな詩を書きたい。

忙しいときに頑張ったのが、この二月に出版した、ぼくの初の散文集である『短編小説をひらく喜び』（港の人刊）という本だ。題名通り、短編小説の解説本だが、広義の意味で、ぼくの文学論でもある。図書館の仕事が終わって家に帰り、眠たい目をこすりながら書き直した末の大傑作！ではないが、出版できたことだけでうれしい。とまあ、あからさまに本の宣伝をしているのだが、要は勤勉にこつこつとしなければ何も出来上がらないわけだ。

そう考えるとこの先、不安である。先の本の出版経緯から、ぼくは他人から見れば勤勉そうに見えるかもしれないが、じつは怠け者なのだ。だらだらと時間を過ごしているのが好き。みんなが怠け者になってしまったら、横浜詩人会はどうなってしまうのか。これは大きな不安だ。さあ、みなさん、テレビもパソコンもスマホも消して、詩を書こう。素晴らしい詩をね！そして横浜詩人会の行事に参加しよう！今後の不安を解消するにはそれしかない。これは自戒をこめての発言です。

詩画展開催される

4月15日（月）～21日（土）横浜市中区翁町の画廊楽Ⅱにおいて詩画展を開催。

多様な形式と内容の詩が、絵画たちによって彩られ、訪れた人たちに憩いと思慮のひとときを与えてくれました。

オープニングパーティーでは、初めに画家代表の手塚國彦さんと詩人会会長の保高一夫さんから挨拶があり、懇親会に入りました。佐々有爾さん、鎮西貴信さん、大石規子さんが詩を朗読。今回のテーマは「街・町」でした。（方喰）

参加者（30名）

新井知次　荒船健次　いだ・むつつぎ　石川敦　植木肖太郎
うめだけんさく　大石規子
大鹿理恵　荻悦子　奥津さちよ
方喰あい子　壁淑子　佐々有爾
小桜ゆみこ　坂多瑩子　佐藤裕
佐藤銀猫　菅野眞砂　鈴木正枝
関中子　鎮西貴信　富永たか子
中山直子　疋田澄　広瀬弓
保高一夫　光冨郁埜　村上亨子
森口祥子　山田玲子

詩画展はいかがでしたでしょうか。アンケートを頂きましたので、いくつか紹介させていただきます。

詩画展出品者では、画家も詩人も、出品してよかったという人ばかりで、よくなかったと回答した人はいませんでした。

実施時期については、ゴールデンウィーク時、梅雨明けの夏、6月～7月等の希望が寄せられ、2週間程度は欲しいという意見もありました。

展示パネルのサイズについては、詩の文字をもっと大きくという要望がありました。（荒船）

老境の夢庵に恐怖しきり

相良蒼生夫

小便が近寄ってくる。緊張するとさらに短く、シトト感じが辛いと老友の、哀れを乞うような仕草がかなしい。この純情可憐な老人は、近くの泌尿器科医は女医さんだから遠慮してきたと、顔を赤らめる。

高齢化社会では前立腺肥大程度は、一般内科で対応できる。斯くいう私も同病であり、二時間半を超える映画は敬遠していて、切迫尿意には留意している。結果、デパート、駅舎、ショッピングセンターなどのトイレの位置、機能、清潔度はいつしか覚えていた。

老境に至り、軽度認知症に捕らわれたと自認する二人だが、いずれが先行しているか、探り合う行為が空しく、お互いそれと察した折の苦笑いが、渋茶を二杯呑んだかの悲哀に黙す。

私達少年期は戦時下にあって、勉学より勤労奉仕が先で、ドングリ拾い、開墾に従事させられた。ドングリは澱粉になる。開墾は、やはり食糧増産であった。

娯楽といえば戦意高揚の映画、文庫、音楽も戦捷を唱うばかり。愛情、別離のテーマは女々しいとして排斥、発禁とされた。

こんな時代が事実としてあった。敗戦の後に祖母がつくづく言った。お坊たちは死なないでよかったと。

老友から切羽詰まった相談が。最近，高厦から落ちる夢をよく見るという。息子が栄転して豊洲のタワーマンションに入るから共に住まないかと、家族も来て親父の面倒は見るから安心だと。母に先立たれた一人身が心配だよとか誘われても、小庭の草花や、遊びの猫も来る平和な風が通る地は去り難いとか。

巨大な蟻塚の蝟集するが如き人口密集地帯は戦争時の破壊対象、テロの標的と誰しも懸念する。

間にいて唯うろろ・おろろと私。真実老友との別離は寂しく哀しく悪夢は我が方にあり、死神の体臭さえ覚えるほど。

新会員　あいさつ

野木　京子

横浜という土地が、詩を書いて生きている私に大きな影響を与えたのかどうか、考えてみました。すると、とても大切なことを思い出したのです。

高校生のころから詩が好きでしたが、大学卒業後社会に出て、さまざまな事情により十年間詩から遠ざかっていました。私が三十二歳のとき、磯子公会堂で詩人の岸田衿子さんの講演会がありました。岸田さんが舞台に出られた途端、風が舞台上を吹き渡ったのを感じました。お話は艶があり、細やかで、言葉という小人が優しく跳ね回っているようでした。私は帰途、洋光台駅前のドトールに入り、小さな椅子に座ったまま泣いたのです。あれほど詩が好きだったのに十年も詩から離れ、そのせいで寂しい思いもして、私はいったいなにをしているのだろうと。

そして再び書き始めました。あの時期に横浜に住んでいなかったら、磯子公会堂に行かなかったら、私が詩に戻ることはなかったように思います。その後すぐに横浜を離れ、札幌、仙台、広島と転居を重ね、横浜に戻って二十年近く経ちました。

昨年から中上哲夫さん、油本達夫さん、長田典子さん、飛松裕太さんの「ビート詩研究会」に参加しています。私以外の皆が横浜詩人会会員（それも前会長と前理事長も）だと気がついて、私も入会したいと思いました。詩を書くことは苦しいですが、それでもやはり詩を書かなければ私は生きている気がしないのです。これからも書き続け、横浜詩人会の皆様とのご縁を重ねていけたらうれしいです。

詩人会の今昔

荒船健次

希望、未来、飛躍、人生に立ち向かい青春を謳歌する熱っぽい話を聞くことが少なくなった。それに代わり私の仲間は暗くなりがちな話をすることが多い。時間をジャブジャブ使ってもまだ大丈夫、贅沢な時間の使い方が青春の特権と思い込んでいた。その頃、私は詩人会に入った。詩人会の創設メンバーは、ブレない個性と感性が伝わり眩しかった。現代詩をリードする先輩達、当然、彼らに触発されることが多かった。詩は無論のこと、生き方、身の処し方等を随分学ばせて頂いた。詩人会ってなんと素晴らしいのだろうと感じた。イベントやいろいろな行事で交流を温め、刺激を受けて帰ると数日間は、刺激の余波が冷めやらず、心地よい昂揚が続いた。

最近会のイベント等に出席する会員は少ない。一二〇名ほどの大所帯にしては、昭和四〇年代半ばから五〇年代頃の会の熱気を知る私には歯の抜けたような物足らなさを感じている。寂しい。当時は横浜詩人会に限らず、詩を書く若者が今よりはるかに多かった。彼等は詩を熱く語り、飢えたように詩を求め、詩にのめり込んだ。詩人会の会員も次第に増え交流が活発になった。やがて健在だった創設者たちが齢を重ね鬼籍に入るにつれ、会の出席者も減ってきた。会員の高齢化が進み、会に出席したくても身体が思うようにならず、出席できない会員も増えてきた。一方社会の成熟化、趣味の多様化等で交流を厭う若い世代の人が増えてきている。事情があるにしろ、会員は詩人同士の交流がしたくて入ってきた。規約にもそのことが明記されている。せっかく入会したのだから、詩人会創設時の先輩達のあつい思いを汲み、会に顔を出し、交流を盛り上げてほしい。会員一人ひとりが魅力ある詩を書くことを心がければ、後に続く若い会員にもその熱意と魅力が受け継がれるのではないか。過渡期と思える詩人会を後世に繋げていけるのではないか。

昨年横浜詩人会は創設六〇年を迎え、記念誌の発行、記念行事を催した。記念セミナーの講演は聴きに行けなかったが、記念行事の書家と組んだ「詩書展」には参加した。書家は詩をどのように受け止め、墨に表現してくれたのか興味津々、上野の都立美術館に見学に行った。書道展は大規模で圧巻だった。受け止められる詩句の心を改めて考えさせられた。過去にも書燈社の協力を得て「詩書展」を行ったが、その都度、書家の筆の渾身と墨の魔力に惹きつけられた。書道展を開催する並々ならぬエネルギー、計画、豊富なスタッフがいて可能な書道展であることに刺激を受けた。

詩人もイベントを行うときは詩を書かなくても詩に関心のある人にできるだけ声をかけ、会の催しに足を運んでもらえるよう、魅力ある広報を考え、イベントの機会を活用して現代詩の普及活動に繋げていきたいものである。

今年の総会は出席者が三〇名足らずであったが、白熱した議論、質疑応答があった。今後の詩人会の活動に前向きな意見や要望が出された。その中で私が記憶していることで皆さんにぜひとも知っていただきたいいくつかを話しておきたい。

横浜詩人会賞は神奈川県在住の新人が該当する年度に出版した詩集を対象詩集とし、その中から選考し、優れた詩集に授与している。

質疑では賞は必ずしも県内に在住している人でなくても受賞できるよう、もっと幅を広げてほしいという意見があった。

日本では日本現代詩人会や日本詩人クラブ等が全国規模で詩集を集め選考して、各部門別の賞を授与している。それに倣ったらどうかという意見だと思う。しかし、横浜詩人会賞が県内在住に枠を設けていることには、賞を支える基金や地元の新人の発掘と育成などいくつかの事情があることを知っていただきたい。

（次回に続く）

横浜詩人会

夏のさかりの詩とジャズ 2019

今年も来ました、その季節
ジャズのふるさと野毛に詩人の声が響きます

日　時：8月25日(日)13時30分～16時
場　所：野毛ジャズスポット「ドルフィー」(Tel 045-261-4542)
（京浜東北線桜木町駅または京急線日ノ出町駅から徒歩5分～10分）
参加料：1,000円（1ドリンク付き）朗読者2,000円

朗読詩原稿募集

参加される方は朗読する詩の
原稿をお送りください。
原稿は100行程度で、
朗読持ち時間は約4分です。
締め切り：7月30日厳守（延長しました）
送り先：〒222-0022
横浜市港北区綱島東3―2―16　遠藤友佳 宛て

近藤東夫人　ふじ子さんのこと

いだ・むつつぎさんから次のようなお便りがきました。

奥さんのふじ子さんに近藤さんのことを書いた「詩人会議」を渡すのが一年も遅れました。理由はふじ子さんのことが分からなかったからです。今回やっとわかりました。

二月二十四日、横浜市内のホームに訪ねると、びっくりしたことにふじ子さんは百七歳、車いすで元気でした。

話が盛り上がったのは、昔、ふじ子さんが実家の法事に出かけて留守にしたあいだ、壷井さん、松永浩介、いだ・むつつぎで近藤さんの家に行き、四人ではだかで酒を呑んでいて、帰ってきたとき、それを見てほんとに驚いたことです。その他、山田今次さんのことなどで話が弾みました。

別れ際、この頑張りで、日本一になってくださいというと、ふじ子さんは笑っていました。

（菅野記）

シンポジウムに参加して

「詩に何を求めるか」というテーマで、柴田三吉、苗村吉昭、花潜幸の三人のパネラーによって詩に関するいろんな意見が交わされた。詩情は他の分野にもみられる。書いた詩は3か月～1年寝かせる。長く寝かせれば腐敗する。誤読が複数生まれる詩がよいとか、いや分かりやすい詩のほうが好きだとか。詩の創作については、言葉を加えていく足し算と、長文を削っていく引き算がある等々…。

これだけでもわかるのだが、詩に対する考え方は、人それぞれであり、「何を求めるか」という問いに、具体的な答えを出すことは不可能なのではないかと思えた。若い人ほど「正しい答えを求める傾向がある」という意味の話が出たのが印象に残っている。私は何のために出かけたのかな？　やはり、答えを求めていたのだろう。歳は若くないが、まだまだ未熟。自分の想いを発信するために、真剣に詩と向き合いたい。（鎮西記）

現代詩セミナー
福間健二講演会
「詩は生きている」
6月30日（日）
14時30分～16時30分
かながわ労働プラザ（Lプラザ）

天気はあまり良くなかったが、参加者は多かった。開始時間2時には、すでに椅子も埋まり、定刻に保高会長の挨拶で始まった。初めに、柴田千晶さんと村山精二さんが福間健二さんの詩集『青い家』から詩を朗読、その後に福間健二さんが、新しい詩を朗読された。

ついで講師のプロフィール紹介。詩人、翻訳家、映画評論家、映画監督、首都大学東京の名誉教授と幅広く活躍されていて、『青い家』では第19回萩原朔太郎賞および第49回藤村記念歴程賞を受賞されている。

講演は柴田さんの朗読『蛍』と村山さんの朗読『生きている顔の町』を書かれた頃のこと、ご自身の詩の在り処から話しはじめられた。自分にとって詩の枠は必要で、そこからどれだけ自由になれるか、3・11以降、特に色々な事件と結びつけて考えている。

福間塾ではその都度、「課題」に応じて書くということをやっていて、読まれた2篇も4月、5月の作品。詩で何をやるか。まずまわりのことが題材として浮かぶ。そこから遠いものをどう引き寄せるか。ご自身の詩から解説されたが、その展開の仕方はとても興味深い。時間・空間を自在に、社会で起きた一般的な出来事、事件などを織り込んで展開するのだが、狭いところから、とてつもなく広い世界にまぎれこんでしまう。その自由さが楽しいと思った。

社会性を持つべきだと3・11以降強く感じていて、ずっと考えているが簡単には書けないとのこと。社会の事件や出来事は情報としてすぐ広がっていき、その感じ方は一般的な感じ方となり、詩の言葉としては力を持ちにくい。でも一般的（手垢のついた言葉）と対比して、独創的、特殊な考えというものもあるが、そうではなく普通であればいいのではないか。詩に今、何が一番必要かというと普通ということを思っている。書いている人がいて、詩があって、読まれる。でも詩人が引っ込んでいるのではないか。どう生きてるか、問題となる場所があるのではないか。人は自分の人生に責任があるという哲学的命題と、作品を書くことがどう関わるか考えたい。考えることで表現の世界に隙間をあけたい。イデオロギーとか、正しいとされている箱や台があって、その社会性の中にとりこまれやすいが一つ一つぶつかっていきたい。

「一般的」と「普通」について、またいい詩について話された。資料として配られた13の作品についての解説後、時間が押してきたが質疑応答に入り、10分オーバーで終了。懇親会は味臨軒31名参加で盛会であった。（坂多）

参加者
＊会員24名
村山精二　植木肖太郎　柴田千晶
岡部淳太郎　金井雄二　伊藤悠子
草野早苗　富永たか子　中島悦子
森口祥子　佐相憲一　山田玲子
新井知次　鈴木正枝　塩路明子
大鹿理恵　広瀬弓　進藤友佳
保高一夫　関中子　方喰あい子
坂多瑩子　菅野眞砂　鎮西貴信
＊会員外20名

光ある辺り

伊藤　悠子

二〇一六年九月八日夕刻、電話が鳴って出ると、ある賞のことを告げられた。候補になったのだろうかと思ったが、受賞が決定したとのことだった。一体どうしたのだろうと驚いて、知らせてくださった方の問いにぼんやりと答えていたのだが、「これまで受賞歴はありますか」と聞かれ、はっと目が覚めるような気持ちになり、「第四十四回横浜詩人会賞をいただいています」と言っていた。とっさの場合でも答えられるほど心に刻まれていたのだろう。その後、信じられない思いのまま「受賞の知らせを受けて」という報道関係に配信する文を二時間以内ほどで書かなければならなかった。台風のあとの風で揺れている庭のユキヤナギを見ながら書き、メールで送った。私も揺れていた。

銀座であったその授賞式には横浜詩人会の方もはるばるいらしてくださった。お顔がわかるたびに心強かった。会場でお一人おひとりに挨拶することはできなかったが、遠く手を振ってくださる方もいらした。川端進さんであった。川端さんは優しい方だった。

横浜詩人会に入会してからもう六年半ほどになる。関内、桜木町と時々遊びに寄らせていただくだけで、お役に立てていない。東林間の自宅から横浜に向かうと、港からの風、もうじき海にそそぐ河のにおいを感じる。明るい日が多かったが、大雪の日もあった。長靴を履いて出かけ、会場のホテルで履き替えた。

親睦は私にとって、やはり詩作品あってのことのように思う。会員の方とお会いしてから、気持ちが戻っていくのはその方の詩集あるいは一篇の詩の光のある辺りだ。

詩を読んで、お会いして、また詩を読んでその方を思い出すというそのひそやかなくり返しが、確かに何かをもたらしている。

【理事会報告】

第3回理事会

司会・関　記録・鈴木

3月1日10：00～12：45

①総会の反省・会則の見直し

②詩画展の検討

アンケート・朗読の実施等

③セミナー　講師について

第4回理事会

司会・関　記録・鈴木

4月5日10：00～12：00

①詩人会賞について

選考委員の候補

②詩画展・出展数30名

③セミナー「詩は生きている」

講師・福間健二　プログラム・チラシを検討する。

④入退会者確認

第5回理事会

司会・関　記録・鈴木

5月10日15：00～17：00

①詩人会賞選考委員打診中

第一回選考委員会7月4日

対象詩集アンケートの葉書

他チラシ等会員に送付予定

②年会費未納者・基金の検討

③詩画展好評・百数十名参加

④セミナー・係分担検討

⑤詩とジャズ・チラシ検討

〈会計からのお願い〉

横浜詩人会賞基金にご寄付を頂きたく、払込取扱票を同封いたしました。

一口千円からです。どうぞよろしくお願いいたします。

年会費未納の方は、お振込みをお願いいたします。詩人会は、皆さま方の会費によって運営されております。

（会計・方喰）

〈住所変更、退会について〉

理事長までお知らせください。

会　員　募　集　中

横浜詩人会に入会ご希望の方、ご紹介の方はご連絡ください。詳細は理事長または担当理事まで。

〒220－0003 横浜市西区楠町7－1－2603

鈴木正枝（担当理事）

メール：ayachan@zb.cyberhome.ne.jp

【会員消息】（順不同・敬称略）

〈退会〉（前号 未掲載分を含む）
大谷亮太　野島茂　水野るり子
宗美津子

〈入会〉
野木京子　横浜市金沢区平潟町31—2—902
相原京子（前号 住所未掲載）
横浜市神奈川区白幡上町10—6—105

〈会員の詩集〉
松浦成友『斜めに走る』（思潮社）
佐藤美樹『階（きざはし）』（砂子屋書房）

〈会員参加の詩誌〉
「季刊文科セレクション」2　荻悦子
「横浜ペンクラブ」30号　浅野章子 うめだけんさく　植木肖太郎　荒波剛
「東北詩歌集」絹川早苗　佐相憲一　関中子
「沖縄詩歌集」井上摩耶　洲史　山本聖子
「Something」28　壁淑子　草野理恵子
「Donc」2号　鈴木正枝
「コールサック」97号　佐相憲一
「季刊びーぐる」42号　中島悦子
「花」74号　下川敬明　田村雅之
「幻竜」29号　弓田弓子
「ERA」三次12号　荻悦子　細野豊　田村雅之　草野早苗　今泉協子　方喰あい子
「潮流詩派」257号　植木肖太郎　山本聖子
「るなりあ」42号　鈴木正枝
「Tumbleweed」5号　鈴木正枝　宗田とも子
「八景」4号　野木京子
「山脈」二次21号　三上透　今泉協子　下川敬明　中村不二夫
「ぱれっと」14号　植木肖太郎　洸本ユリナ　佐藤美樹　塩路明子　関中子　田村くみこ　疋田澄
「4B」福原恒雄
「地下水」231号　保高一夫　うめだけんさく　林柚維　関中子 方喰あい子 鎮西貴信　村山精二
「二兎」9号　絹川早苗　坂多瑩子　徳弘康代
「space」145号　木島章　草野早苗 鈴木正枝 中上哲夫
「京浜詩派」225号　洲史　梅津弘子　佐々有爾　いだ・むつつぎ
「オオカミアンソロジー2018」　光冨郁埜
「詩と思想」5・6月号　徳弘康代　進藤友佳　絹川早苗　草野早苗　佐川亜紀　坂井信夫　下川敬明　藤森重紀 方喰あい子
「詩人会議」5月号　梅津弘子　いだ・むつつぎ
「日本未来派」236号　壁淑子
「伏流水」67・68号 うめだけんさく
「横浜詩誌交流会会報」　菅野眞砂　新井知次　佐藤裕　うめだけんさく　西村富枝
「Lyric jungle」25号大木潤子
「papier colle 中原中也」vol.2　大木潤子
「ポスト戦後詩ノートvol.18　鈴木東海子特集」　大木潤子
「青い花」四次92号　相良蒼生夫　長谷川忍　平田好輝
「龍」155号　松浦成友
「千年樹」78号　方喰あい子
「アル」59号　西村富枝　阿部はるみ
「左庭」42号　伊藤悠子
gooブログ「詩客」自由詩時評
「四季派学会会報」夏号 大木潤子

《会員参加のイベント等》
「日本現代詩人会ホームページ」投稿詩選者　光冨郁埜
「国民文化祭にいがた2019」現代詩部門 選者　野木京子
横浜詩誌交流会主催「第42回講演と詩の朗読の集い」の開催 9月14日（土）
馬車道十番館　講師：斎藤貢
演題「あの日から八年」

【お願い】
会員消息については、編集や印刷所への入稿に間に合ったものを掲載しております。皆さまからの情報提供が頼りです。記載漏れ、誤記、掲載希望などありましたら、理事長か通信担当にお知らせください。（鎮西）
住所：三浦市南下浦町上宮田1528—92　北條方
メール hojo1733@jcom.home.ne.jp

【編集後記】
今年は早々と熱波がやってきたかと思えば梅雨寒が。その後は、しばらくの間、蒸し暑い日々を我慢しなければならない。お体をたいせつに。（鎮西）

詩人会創立　1958年10月25日
通信創刊　1961年2月10日
会員数　118名